令和7年度練馬区立幼稚園検討委員会（第1回）の要点

日	時	令和7年6月23日（月）	
時	間	18時30分から20時30分	
場	所	練馬区役所本庁舎12階 練馬区 教育委員会室	
出	席	者	学識経験者、区立幼稚園 利用保護者、練馬区私立 幼稚園協会、区立幼稚園 長、区職員

開会

- 1 委員の紹介
- 2 設置の経緯等
- 3 区立幼稚園利用保護者からの区立幼稚園への意見について

【委員からの主な意見】

<区立幼稚園利用の感想>

- ・ 2年間ですばらしい充実した時間を過ごさせていただいた。職員が目が行き届いているという感動と保護者間の連携がかなり強いという点を常に感じていた。
- ・ 他の園とは違い、見学に行った際、自身の子をスムーズに受けて入れてくれた。障害児が増えている区立幼稚園の中で助かっている保護者も多いかと思う。

<区立幼稚園を選んだ理由>

- ・ 近隣の児童館、区立の施設（図書館等）で出会う保護者から話を聞いていた。見学の際、子が安全な場所、安心な場所として認識しているようだったことが入園のきっかけ。
- ・ 区の発達支援センターで話を聞き、区立幼稚園のいい評価を聞いた。保育園見学の結果から私立幼稚園も入園が難しいのだろうと自身で判断し、区立幼稚園を選んだ。

<長期休業日の対応>

- ・ 預かり保育がないため自宅で保育をしていた。
- ・ 夏休み中の前後半に、数日夏季保育として幼稚園に行く機会があった。また、夏季保育でも通常保育でも、保育時間後に園庭開放として親子で自由に園庭で遊べる時間があり、保護者の管理の下であるが、保護者同士が補い合っていた。

<3年保育や長期休業日の預かり、給食の提供の必要性について>

- ・ 3年保育に関しては、10年以上前から保護者内でも希望があった。公立幼稚園のよさを維持しながらの3年保育の実施を強く希望する。
- ・ 長期預かり保育も、夏休み、冬休み、春休みの長期休業で実施されればありがたい。
- ・ 子どもには、小さいうちから社会と関わってほしい。子の特性によっては両親以外と関われる機会が少なくなるため、安心してほかの大人や子どもと関われる機会が増える3年保育はありがたい。
- ・ 同じように長期休業中も、本来色々な遊びができる期間でもあると思う。他者とかかわって遊べる環境があるととてもありがたい。
- ・ お弁当の作成も親の大きな負担ではあると思う。給食になることで助かる家庭もあると思う。

4 今後の区立幼稚園施策、適正規模について

【委員からの主な意見】

<今後の区立幼稚園施策について>

- ・ 区立幼稚園の今後の施策として、障害をお持ちの方がさらに利用しやすいようにするほか、障害をお持ちでない方に対しても魅力を高めたいという狙いがある。
- ・ 今の幼児施設は、社会的なニーズに適応するため、多くの施設が長時間預かりや長期休業日の預かりを実施するなど、保育園的な運営思考が強い。
- ・ 保育園はあくまでも保護者に対するサービスという側面が強いが、それに対して幼稚園は子どもの育ちに対する教育という位置づけが強い。
- ・ 幼稚園はサービスではなく教育だという点に強く共感する。文科省の資料では、既に幼児教育施設は3年保育が一般的だと記載されている。3年保育や預かり保育の実施等も含めて、公立幼稚園の役割を果たしていくことが地方公共団体の大事な役割だと明記している。
- ・ 区立幼稚園の3年保育は、運営維持や入園希望者の需要の対応というよりも、教育の需要として社会から求められていると考えている。
- ・ 親同士のコミュニティや、子どもが小さいときの育児・子育て不安などをフォローできる文化が重要。区立幼稚園には、それを担保しながら3年保育をしてほしい。
- ・ 自治体の役割として就労支援というのがあるのは理解するが、それは保育園に任せればよい。区立幼稚園は区立幼稚園のやり方があり、保育園化する必要はない。
- ・ 区立幼稚園では、毎日の送り迎えの際に気軽に相談がしやすかった。また、担任だけではなく、園全体の先生・園長・副園長と近くで話し合う場が多く設けられていた。
- ・ 園長や担任との正式な面談だけでなく、送迎の際などで保護者の方との毎日のコミュニケ

ーションがある方が、保護者などの変化を感じ取りやすく、良い関係となると思う。

- ・ 区立幼稚園にいる学校支援コーディネーターは、発達に関して不安があるお子さんとのコミュニケーション方法や、福祉との連携に関する業務を行っているのか。
- ・ 支援が必要な園児に係る連携業務などは、特別支援コーディネーターが担っている。区立幼稚園では特別支援コーディネーターを担任が担うという形になっているが、別業務もあるため実際は副園長や園長も特別支援コーディネーターを兼任しているような状況になっている。なお、学校支援コーディネーターは、地域のコミュニティと園をつなぐ役割を担っている。
- ・ 3年保育の実施により、障害のあるお子さんのご家庭からすると、より魅力的な園となる。ただし、現時点で配慮を要する児童の割合は4割となっており、実際の教育活動に当たって、障害のあるお子さんが現状よりも増えることは問題になるか。
- ・ 3年保育の実施は、全ての世帯に大きな魅力があると思う。他の幼稚園や保育園からの転園相談を受ける際、実際に区立幼稚園の教育の質の高さを感じて入園したいと思っても、2年保育によって選択肢から外れてしまう現状がある。区の幼児教育を担っているはずなのに、2年保育で長期休業日の預かりもやっていないという点で入りたい人が選べない状況になってしまっている。
- ・ 区の障害児数のうちの区立幼稚園に通っている障害児はどれほどいるのか。現在の割合によっては、3年保育となっても障害児の増加率は大きくないのでは。
- ・ 現時点で、ほとんどの障害児が区立幼稚園に通っているわけではないため、3年保育にすることで障害をお持ちの方の割合は増えていくとは予想される。
- ・ 令和6年の数字で見ると、障害児の受入れ比率としては圧倒的に区立が多いが、総数としては私立幼稚園の方が多い。区立幼稚園の比率を見ていると、最後の砦として受け入れてほしいというニーズがあるのだと感じる。
- ・ 発達課題のあるお子さんの保護者は、年中からの入園では職員体制の加配がハードルとなるため、年少から入園するしかないと考えているのではないかと思う。保護者が何とか入れたいと考えていると感じるケースもある。
- ・ 私立幼稚園でもなるべく広く受け入れたいと考えているが、区立幼稚園が新たに3年保育を行うことで、発達課題のあるお子さんの保護者は、区立幼稚園という選択肢を選ぶことが増えるのではないかと思う。
- ・ 保育所幼稚園問わず、3から5歳の供給と需要はもうほぼ供給量のほうが上回ってしまっていて、全体としても需要は充足している。子どもたちの教育を保護者が選べる時代になっているため、自分たちの役割を明確に示していく時代になっていくと思う。単に障害のあるお子さんを預かるだけの環境であれば、区立幼稚園に行かない可能性も出てくる。

- ・ 国は、障害児や医療的ケア児が保育の場で育っていけるように施策展開をしている。今後は、定型発達の子も含めて、公立幼稚園の魅力を考えることが重要になる。先駆的にインクルーシブ教育を実践し、外国籍の子も含めて多様性が充実したモデルの中で高い教育の質を提示していく必要がある。
- ・ 第3期練馬区子ども・子育て支援事業計画が策定されているが、公教育を幼児期から途切れなく受け続けていく保障を明確に出さないと、3年保育にしても園児数増につながらないと感じている。
- ・ 区立幼稚園では、先生たちとの密なコミュニケーション、子どもたちに対する配慮の深さ、個性を酌み上げて自己肯定感を上げてくれる教育、そういった環境を体験した。3年間子がその環境で育つことで、小学校に行ったときの強い足場になると思う。工作活動などでもキットではなく素材を用意し、そもそもやるかどうかについても自主性が尊重されていた。子どもの特性も含めた個性を重んじて活動しやすい環境を作っていると思う。決して放任ではなく、伸び伸びと教育がなされていたと感じており、3年保育で長くその教育方針に触れさせたいと思う。小学校に上がるまでの貴重な期間を、少しでもいい環境にさせたい。
- ・ 保護者としては、早くから社会に触れてほしいという思いがあった。区立幼稚園以外に選択肢がないと考える方にとっては、3年保育はありがたいと思う。
- ・ 区立幼稚園3園や私立の先生たちとは一緒に学びながら研修を深めている。遊びを中心とした質の高い保育をしているということを私たちも自負しており、教員の立場からも長い期間教育を行いたいと思っている。
- ・ 区立幼稚園の価値は人的な余裕と保育者の質の高さ。長時間預かりの実施が価値ではないと感じる。子ども中心の施設というのは今貴重な存在であり、区立幼稚園は子どもを一番幸せにできる場だと思う。
- ・ 働いているが公立幼稚園に入れたいという保護者は、延長保育や長期休業日の預かりがないと入れない。教育的な価値を認めているから入れたいという方から預かり保育をしてほしいというニーズもあることを考えると、長期休業中の預かりは是非実施したい。
- ・ 第3期練馬区子ども・子育て支援事業計画の資料では68%が共働き家庭だが、教育内容や先生方の質が高いという点から、それでも区立幼稚園に預けたい方がいると思う。保育所に預けることと区立幼稚園に預けることの違いはゆとりある子育て時間を楽しめることだと思う。区立幼稚園では、子どもの最善の利益と、大人が大人であることの間接点を先生と話し合っ親が決めていける。就労しているとそちらが優先となるが、保護者の方のお話を聞くと、区立幼稚園では親が覚悟を持って子育て時間を楽しむということができていると感じる。

<適正規模について>

- ・ 現実的には、子どもが減る中で全園が 100%充足するのは難しいと思う。この点からも、適正規模を考える必要はないか。
- ・ 適正配置は、1 園の園児数が少なくなったことが理由だと思うが、一方で 3 年保育の実施は園児数が増える施策だと思う。これは同時に行うのか、3 年保育による園児数の変化を踏まえて適正規模を考えるのか。園児数を増やす施策をした上で、適正配置を検討してもよいのでは。
- ・ 園児数の減少は急激なスピードで進んでいる。教育効果や他者との関わりという点でも早急な対策を考えなければならないという認識。
- ・ 自分の子どもを通わせた園に対しては愛着が強い。各園の地域性もあり、光が丘の 2 園でも志向や求められているものが違う。統合した場合に区立幼稚園でなくてもいいという考えに及んでしまうのでは。
- ・ 区立幼稚園に通わせる保護者の園に対する思いは強い。それだけ質の高い保育をし、子どもが健全に発達し、保護者方にとってもよい時間を過ごせたという結果だと思う。その教育方針を守れるのなら、3 園残してもよいのではないかと思う。
- ・ 私立幼稚園も 3 年保育、長期休業日の預かり、給食の提供を実施している。その中で定員充足率 50%を下回ってきているような園もある。このため、3 年保育の実施は需要と供給の問題を解決する施策というよりも、教育的側面として重要な施策という位置づけになると思う。

区立幼稚園での 3 年保育の実施は賛成だが、上記のとおり園児数が直接増える要因になるかは疑問。現に私立幼稚園が先例として行っているがそれだけではうまくいかないということを実証している。幼稚園の選ばれるための魅力自体が重要と考える。

- ・ 私立幼稚園から見ると公立幼稚園の大きな魅力というのは、発達課題のあるお子さんに対する専門性や受け入れられるキャパシティ・人的資源、または自由保育に対する理解の深さなどに感じられる。その点をぜひ強く生かしてほしい。また、幼稚園は小学校と違い、通常級や固定級などの通い方がなく、ひとまとまりの 1 クラスしかない。このため、どうしても発達課題がある子の私立幼稚園での受入れ比率は、資料のグラフのとおり、低い傾向となってしまう。
- ・ 障害児の受入れに対応するには、ある程度のリソースの集中も必要とは思う。専門性がある人たちが集まり、柔軟に対応できる環境を維持する体制が大事と思う。3 年保育や長期休業の預かりなどに前向きに取り組みつつも、その専門性を維持していくための体制を考えることも重要。
- ・ 公立幼稚園そのものが廃止になってしまっている市区町村というのもある中で、公立幼稚

園は大事な存在。経済性を考えずに教育を提供できる価値などを維持できることは非常に重要。今の区立幼稚園があって、区の所管部署が連携しているこの体制を基に、上記のような区立幼稚園の価値を維持できるビジョンも検討の視点の一つと思う。